

# 幼児と音楽

清水美代子

## 1 幼児期の音楽

わが国では幼稚園教育の行なわれた初めから唱歌と遊戯が取り入れられていた。そのねらいが、現在取り上げられている音楽リズムのねらいと同じであるかどうかは、はっきりしないが、われわれがみつめるいくつかを、当時の人もいろいろな形でみつめていたと思う。

現在の音楽リズムに取り上げられているねらいは、音楽教育のスタートの時代としては、申し分なくいろいろに取り上げられている。が、実際に行なう場合には、それらの「ねらい」を満たすための配慮はそんなに容易なものではないと思われる。

幼児期が音楽の基礎的感觉を育て上げる上に、最も重要な時期であることは、はっきりしていても、その方法については、年齢

的に低い年代であるから、もっともその年齢に合った扱い方で、これが実りを持つということである。端的にいうと、幼児は喜びを感じて行なう中でのみ、よい育ちをするものであって、心の少ない状態では、一向に育ちを見せない場合もある。それが「楽しく行なう」「喜びを持って行なう」という言葉の中にむずかしい要素のある理由である。その時樂しそうに行なわれていても、それが正しい方向に向かって行なわれていない場合には、次の段階では、喜びを伴うことのできないものとなりかねない。しかも、これが身体的な生理につながりを持ち、喜びという心の動きにつながるものであると考えるほどに一そうむずかしい要素を含むものと思われる。

## 2 子どもは音楽が好きか

このことについては、前に書いたこともあるが、子どもは音楽が好きかという点、この時代には、必ずしもそうではない。詳細は省くが、第一の原因に上げられることは、歌唱が不得意な子どもが、すでに音楽を嫌い始めていることである。歌う場の多い幼稚園の生活で、正しく歌えないことは、生理的にも感覚的にも不快で好きになれないのは当然で、多くの場合は高低が正しく行なわれない。これは音楽教育の場でのよい処理をすることによって、十分避けられるが、身体につながることであり、目に見えない発声帯のことであり、いつてわかる年代でないなどの理由から、容易なことではない。

いろいろの調査から考えられることは、子どもが音楽が好きだといえるのは、幼児教育の始まる前の家庭保育の時代であると思われる。子どもは生後二、三カ月で音楽に反応し、七、八カ月には、はっきりと音楽を身ぶりで受け止め——テレビなどの音楽をおどりに近い形で示す——一年がたつたあたりから、声を出して歌い出す。また打楽器にしても、七、八カ月で既に打ち出して、音の出ることを喜び、早い子どもでは、この頃から吹いて音の出る笛を口にして遊ぶ。そんなことを考える時、音楽的営みに対して純粋に喜ぶのはすいぶん早くからで、三歳または四歳で、幼稚園、保育園に来る以前に相当違った音楽的環境の中で異なった音楽的成育を持って来るわけである。

大体において、一拍に反応するだけのリズム感を持つており、ここで友だちといっしょに行なうことの喜びを味わうことで、楽器を持たず機曾として取り上げることが必要である。音楽の営みの中には、子どもが好きになる場をいくつも含んでいるものである。それにおとなが気づいて、方向づけることが望ましい。ことに楽器の音色にも十分興味を持つてゐる時代でもあるし、旋律楽器も扱える年代にもなっている。歌唱の正しい能力は、これを扱うことで、余程正しい方向づけをすることができる。自分の営みに対して評価することが、だんだんできるようになるのもこの頃で、できるという安定感の中で好きという気持がもたれ、おとなの考えるのと異なった意味を持つようになれる。子どもなりにそのことを理解し、愛情を持ち、技術的にもできたという満足を感じることに、喜びをもって行なうことができるので、指導者は一つの音楽教材をそんな観点で、いろいろな方法で扱い、少しでも子どもが理解と愛情を持ちうるような配慮をしなければいけない。

この時子どもに本当の音楽性が育ち、子どもなりにその実りの積み重ねを感じて、本当の喜びとなると思う。ただ音楽をさせているというおとなの満足感で処する時には、むしろ営むほどの喜びを持たないものである。指導者が音楽的な営みに対して子どもが喜びを持ったか持たないかを的確にみつめる目と、その反応に

対処しうる力を持つ時、音楽の大切な基礎的な時代のしっかりした芽ばえを育てることができる。これが、小学校の三年、四年の頃まで続けて育てられて行く時、恐らく人間として生きる中で音楽教育の持つ役割を果たす力となるのであらうと思われる。

### 3 幼稚園の指導経過と小学校のつながり

ちょうど私がこの研究のデータの対象として取り上げた当時の幼児が既に中学校へ進む年になってきた。近くの三小学校にほとんどが進んだので、本年はその小学校に協力を得てこれらの生徒が、どんな形で育っているかを調べた。方法としては、過去幼稚園で一年ごとに別のいろいろの方法を取ってきたので、それが各年毎に生徒にどう影響したかを小学校の評価を通して調べたのである。評価の対象は、関心度、歌唱能力、楽器の演奏能力、音楽理論に関する理解度という四項目である。これに対する評価は下の表の通りである。(表Ⅰ)

#### 指導経過

三六年度 歌唱教材には音域の狭いものを選び、発声発音の指導を取り入れ、またわらべ歌の輪唱や擬音等による二部輪唱をした。

三十七年度 前年にひきつづき歌唱の指導をすると同時に、関心の少ない者にも有鍵楽器に接する機会を与えるように努めた。

表Ⅰ 小学校における評価

学 年	1	2	3	4	5	6	
学 人 数	64	64	44	39	30	30	
関 心 度 (鑑賞をふくむ) %	A	22	20	20	23	31	27
	B	33	33	30	31	41	27
	C	30	30	32	38	24	40
	D	10	17	9	8	4	6
	E	5	0	9	0	0	0
歌 唱 能 力 %	A	17	19	23	21	17	20
	B	42	30	16	31	42	33
	C	30	37	41	38	31	40
	D	6	11	16	8	10	7
	E	5	2	4	2	0	0
楽 器 演 奏 能 力 %	A	41	27	25	25	38	33
	B	20	28	28	36	28	37
	C	24	23	20	38	24	20
	D	12	16	18	0	10	0
	E	3	6	9	3	0	0
理 論 に 対 す る 理 解 度 %	A	19	31	25	21	31	27
	B	35	31	30	21	31	33
	C	30	25	27	50	24	37
	D	11	8	14	8	10	3
	E	6	6	5	0	4	0

三八年度 園児がいつでも自由に弾くようオルガンを設置し、十月からハーモニカを各自持たせ、リズム奏、メロディー奏を指導した。

三九年度 前期は前年度の指導方法をとリ、後期には全員にオルガン、ハーモニカを指導した。

四〇年度 年長組は前期からハーモニカを指導。同時に希望者

には鍵板ハーモニカの指導をした。

四一年度 年中、年長組ともハーモニカを学年に応じて指導し、年長組全員に鍵板ハーモニカの指導をした。

なお、当時の幼稚園における関心度とそれが小学校において示した関心度との比較もしてみた。それは次のような結果となった。ただしABCの三段階とした。Aは表Ⅱの関心度の項のA+Bであり、BはC、CはD+Eである。(表Ⅱ)

続いて幼稚園における知能検査の結果と音楽評価との比較もしてみた。六年生に関する検査表が見当たらないので、省略をしたが、音楽の評価は上記四項目の平均値をもって、五段階にして比較した。数の配分が知能指数の配分に対して音楽評価の配分がJ型を示した。(表Ⅲ)

以上の調査は一幼稚園(名古屋、私立堀田若草幼稚園)の調査であるために調査数は少ないが大体の傾向はつかめたと思う。知能検査の結果はどの年度も正規の分布をしているのに、音楽は幼児期に育ったものが土台になって、そのまま小学校に受けつがれて、発展するものと思われる。また音楽が技術的な性格を持つために、時には教育的な観点から、ゆがみの出ることもあるが、幼児期においては、人間、協力の精神が合わせて育成されていくことから、この時代には問題が少ない。また楽器は遊びの場における素材として扱うことが多いので、個人指導もしやすい。それ

表Ⅱ 幼稚園における関心度と小学校の比較(%)

学 年		1	2	3	4	5	6
幼 稚 園(関心度)	有	59	50	91	59	40	83
	A	50	47	54	36	33	53
小 学 校(関心度)	B	9	3	20	27	7	26
	C	0	0	16	0	0	0
	%						

  

学 年		1	2	3	4	5	6
幼 稚 園(関心度)	少	42	50	9	41	60	17
	A	3	3	0	8	30	7
小 学 校(関心度)	B	23	29	5	26	23	10
	C	11	12	5	8	7	0
	%						

(学年の人数は表Ⅰと同じ)

表Ⅲ 幼稚園の知能段階と小学校の音楽教科の評価の比較(%)

学 年		1	2	3	4	5	6
A	知能	6	4	20	5	1	↑上位 ↓下位
	音楽	25	24	23	23	29	
B	知能	27	28	36	19	19	
	音楽	32	31	26	30	35	
C	知能	47	40	21	39	46	
	音楽	29	30	30	40	26	
D	知能	18	24	18	15	23	
	音楽	10	12	14	6	9	
E	知能	2	4	5	22	11	
	音楽	4	3	7	1	1	

(学年の人数は表Ⅰと同じ)

故、その興味や音楽性に合わせて簡単な旋律楽器になれさせるとよい。

指導者は、系統的、科学的考慮のもとに、興味深く楽しい指導方法をくふうし、特に家庭の影響を多く受けているので、劣性を示す幼児に対しては、それを除去するように努力して望ましい状態(市町短期大学)で小学校へ進めたい。